『地域共創学会誌』，創刊号，3-12，2018
KYUSHU SANGYO UNIVERSITY, *Journal of Collaborative Regional Development* No. 1, 3-12, 2018

【論説】

近代の別府市鉄輪温泉における旅館業の成立

浦　　達　雄

要　約

別府市鉄輪温泉は，別府温泉郷（通称・別府八湯）を代表する湯治場（療養温泉地）である。伝説によれば，鎌倉時代に一遍上人が蒸し湯を開いたとされ，蒸し湯を中心に旅館業が成立したと思われる。本研究では，資料の関係で近代（明治・大正・昭和戦前）を対象に，各種資料や聞き取り調査などをもとにして，旅館業の成立を明確にしたい。その結果，江戸後期，特に明治初期以降，蒸し湯を中心として旅館業が成立し，昭和初期には旅館業が増加し，温泉集落の範囲が拡大したのである。

Keyword：別府八湯，鉄輪温泉，湯治場（療養温泉地），旅館，温泉

1．はじめに

1.1．研究の背景

別府市には８ヵ所の温泉地が成立し，別府温泉郷または別府八湯と称される。現在では別府八湯が一般的に用いられている。別府八湯の内，現在の旅館業の集積地は別府と鉄輪となる。

高度経済成長期以降，別府は温泉都市観光地として成長・発展したが，鉄輪は従来の湯治場機能を維持し，言わば療養温泉地としての性格を保有している。

ところで，別府市における旅館業の成立はいつのことか。明確な資料はない。ただし，別府においては，文化年間（1804～1818年）に湯宿と称する旅館が21軒成立したと言われる[1]。しかし，鉄輪においては，情報がほとんど残されていない。

そこで，本報告では，近代の鉄輪温泉における旅館業の成立について，各種資料や聞き取り調査などをもとに研究をすすめることは意義深いと判断し，研究テーマを設定した。

1.2．従来の研究成果

別府市（別府八湯）に関する従来の研究成果としては，山村順次が積極的に調査をすすめた。その代表的な論文は，山村（1981）がある。山村は，主に別府を事例として，地域変化の実態を明確にした。浦（2006）は，別府八湯の観光地域形成に関する研究をすすめ，古代から現代に至る別府八湯の形成過程を明確にした。

鉄輪に関する代表的な論文については，小堀，山村（2004）と大山（2007）がある。前者は，湯治場としての鉄輪の地域変容を追究し，鉄輪の実態を明確にした。後者は，近代の鉄輪にお

---

[1] 次の文献に記載されているが，詳細は不明と言われる。別府町役場（1914）『別府町史』別府町役場，196頁。

いて文献調査・実態調査などを実施し，その結果，共同湯・旅館・街・地獄巡りなどを総合的に捉え，鉄輪の温泉地としての成立過程を明確にした。

1.3．研究の目的と方法

研究の目的は，近代の別府市鉄輪温泉を舞台として，旅館業の成立を明確にすることである。近世期は資料不足で，明治期以降を主に研究対象としたい。

研究の方法は，文献調査・聞き取り調査などである。研究部門では，山村（1981），小堀，山村（2004），浦（2006），大山（2007）などの文献を主に参考にした。

しかし，いずれの論文も，鉄輪における旅館業の成立については，明確に触れていない。郷土に関する文献は，後述するように，明治期以降の文献や資料が数点あり，それをもとに実態把握に努めた。特に，郷土資料はその存在は明確だが，研究対象になったものは少ないと思われる。聞き取り調査では，郷土史家・旅館経営者・観光関係者などを対象に実施した。

2．別府市鉄輪温泉の概観

鉄輪は，古くから湯治場（療養温泉地）として成立し，高度経済成長期以降，別府八湯では，別府と共に 2 大温泉集落を形成した。鉄輪の温泉集落は，江戸後期において，蒸し湯（現在のむし湯ポケットパーク）界隈で成立し，その後，明治初期，続いて昭和初期，さらには第 2 次世界大戦以後に，現在のいでゆ坂・湯けむり通り・銀座通り沿いに旅館業が進出し，温泉集落が拡大したのである。

しかし，1973（昭和48）年の石油危機以降，団体客が激減し，別府では大型倒産が目立つようになった。鉄輪は九州横断道路沿いで観光旅館が進出したとはいえ，旧温泉集落内では，湯治場機能を維持した。湯治客を対象とした小規模旅館が多かったので，倒産は免れたのである。とはいえ，近年，事業継承の立場からみた後継者不足・客足の減少などもあって，転業や廃業が増加し，旅館数の減少が始まっている。

九州横断道路沿いに進出した観光旅館の大半は，団体客の減少・後継者不足で，廃業または経営者の交代が行われた。

一方，温泉集落の内外で，高級和風旅館・新しい形態の旅館（素泊まり）などが進出しており，鉄輪は新しい局面を迎えている。さらには「かんなわ蒸し通りずむ」（2018年 6 月 4 日～30日）など新しいイベントの開催，街歩きに呼応してスイーツ店など新業態の店舗も進出し，街全体では往時の賑わいを回復しつつある。

2017年現在，別府市全体の旅館数は111軒（別府市旅館ホテル組合連合会加盟）を数えるが，鉄輪温泉は38軒（鉄輪旅館組合26軒・鉄輪やまなみ旅館組合12軒）に留まっている。鉄輪旅

館組合は和風旅館と貸間旅館が主体の組合で，鉄輪やまなみ旅館組合は観光旅館と和風旅館が多い。後者の旅館はマイクロバスを付帯して，さらには外来資本による経営，九州横断道路付近に立地している（浦，室岡2018）。

3．豊後国速見郡村誌

『豊後国速見郡村誌』[2]は，1877（明治10）年頃の発行と言われ，別府村・鉄輪村を含めた速見郡内の村々の地誌が記載されている。これが，鉄輪の旅館数を示す一番古い資料と思われる。表1は同誌をもとに別府八湯の村々の様子を整理したものである。旅館は，村によって，旅逆・旅宿・旅宿屋と記載され，現在の別府八湯では142軒を数える。その内訳は，別府40軒・浜脇30軒・野田2軒・亀川8軒・鉄輪34軒・鶴見10軒（明礬10軒）・立石18軒（観海寺

表1　別府八湯の村々の様子（明治初期）

内訳	野田村	亀川村	鉄輪村	鶴見村	別府村	浜脇村	立石村
戸数	86	247	139	280	757	509	147
本籍	81	241	138	276	745	496	140
寄留					3	3	3
（士）				2		1	
（平）						2	
社	4	2	1	1	6	2	3
寺	1	4		1	3	5	1
人数（総計）	396	1,116	536	1,272	3,182	2,439	602
男	195	556	247	658	1,541	1,218	302
（士）				4		1	
（平）				654		1,217	
女	201	550	289	614	1,641	1,221	300
（士）				4			
（平）				610			
戸業							
農業	80	170	130	275	360	250	118
商業		25	3		160	45	4
漁業		6			15	180	
工業		40			70	30	
（女）縫製					30	70	
貸席					10	4	
芸娼妓					20		
芸妓数						11	
旅宿屋						30	
旅宿					40		18
旅逆	2	8	34	10			
温泉	赤湯	湯耶泉	蓼原湯	照湯	楠湯	東湯	堀田湯
	蒸湯	四の湯	浮湯	小倉湯	不老湯	西湯	上田湯
			蒸風呂	明礬湯	永石湯	泥湯	観海寺湯
			熱湯	今井湯	新湯		
			赤湯地獄	蒸湯	掲示場湯		
			地獄原		畔無湯		
					潮湯		

（注1）別府史談会事務局（1992）「豊後国速見郡村誌（抄）」別府史談・第6号，92-114頁と付表（1枚）により作成。
（注2）現在の別府市に属する主な村を取り上げた。
（注3）数値で合わない部分を一部修正した。

[2] 豊後国速見郡村誌（抄）は，別府史談会事務局（1992）『別府史談』別府史談会・第6号の92-114頁と付表（1枚）で掲載されている。

8 軒・堀田10軒）となる。なお，貸席は別府10軒・浜脇 4 軒を数えている。

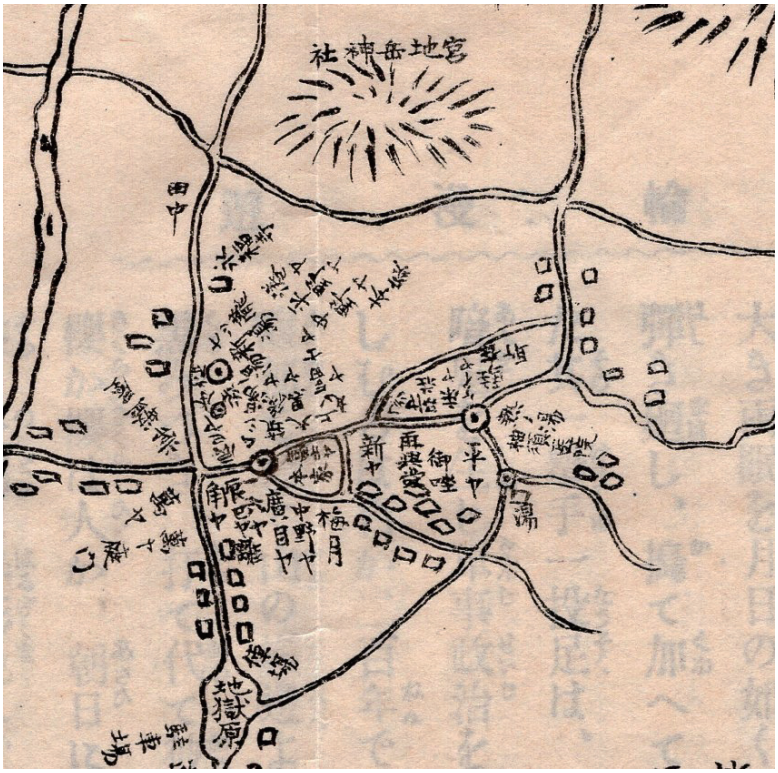
従って，鉄輪の旅館は34軒を数え，別府40軒に次ぐ旅館数で，浜脇の30軒を上回っている。しかし，屋号の記載がないので，詳細なことは不明である。純粋な専業旅館ではなく，農家が旅館を兼業したスタイルと言えよう。

4．大分縣案内

『大分縣案内』は，1902（明治35）年の発行で，大分県内の政治・経済・社会などを記載している。同書によれば，鉄輪として「旅館10数戸あり，冨士屋を第 1 とし，萬屋・常盤屋・辰巳屋・中野屋之に次ぐ殊に冨士屋別荘は両 3 年前の新築にかかり宏壮にして輪奐の美を極め加えるに展望頗る佳なり此地一體土地高燥にして大気清く且つ展望に富めるを以て養痾には最も適せり故に浴客の多きこと別府浜脇に次ぎ其の数年々10万を下らずと云ふ」と記載されている（一部現代文に変更）。

明治中期の旅館業は，冨士屋を中心とした上記の 5 軒が有力旅館であり，蒸し湯を取り囲むように立地したと言えよう。なお，冨士屋は，富士屋の記載も見られるが，現在「冨士屋」を用いており，ここでは冨士屋に統一したい。

図 1　鉄輪の概略図（明治後期）



（注）永井蘇陽（1906）による。

図2　冨士屋（本家）

図3　冨士屋（新築）

5．五人奇遇鉄輪漫遊

『五人奇遇鉄輪漫遊』[3]は，1906（明治39）年発行の旅行記だが，鉄輪の地図が掲載されおり，参考になる点が多い。図1は鉄輪の概略図（明治後期）である。

この図をみると，蒸し湯を中心として，旅館業が展開している。具体的にみると，港屋・平野屋・中野屋本家・筑後屋・大黒屋・上冨士屋・冨士屋本家（図2）・冨士屋別荘（図3）・新屋・御座・大平屋・中野屋・辰巳屋本店・辰巳屋離れ・萬屋・常盤屋などである。

萬屋と常盤屋は，別府に至る街道（現在の湯けむり通り）沿いで，蒸し湯の入り口に位置している。いずれも開業は江戸後期と言われ，鉄輪を代表する名門旅館として知られる。江戸時代には，旅人を泊めたとする記述がみられる。

なお，辰巳屋は，同旅館のパンフレットによれば，安政年間（1855～1860年）の開業，矢田（1987），後藤（1987），安波（1988）によれば，冨士屋（安波家）の先祖は，谷川美濃守（16世紀の豪族）と言われ，その後，資産家となった。聞き取り調査によれば[4]，冨士屋本館の新築は1877（明治10）年である。冨士屋別荘は1899（明治32）年の新築となる。

さらに，中野屋は，明治初期に，現在の北鉄輪の山中から蒸し湯付近におりてきて旅館を開業したと言う[5]。温泉閣は永福寺の宿坊がルーツで，港屋は庄屋の経営である。永福寺は，一

---

[3] 同書のコピーは，小野弘（郷土史家）所蔵。図2・図3は実物を所蔵。
[4] 小野弘（郷土史家）の地域住民に対する聞き取り調査による。
[5] 佐原正浩（中野屋主人）に対する聞き取り調査による。

遍上人が鉄輪を訪れた際に，大友頼泰から寄進を受けた湯滝山松寿寺が起源とされる。しかし，その後何度か廃絶し，1891（明治24）年に現在の名称となった。

温泉は，蒸し湯（現在のむし湯ポケットパーク）・熱の湯・渋の湯（現在の渋の湯ポケットパーク）・新湯（現在の渋の湯）などが記載されている。

6．温泉使用料徴収人員

「鉄輪温泉使用料徴収人員各月宿屋別表」[6]は，宿屋別・月別に，延人員を計上しており，その資料的な価値は大きい。ただし，宿屋氏名しか書かれていないので，屋号は推計となった。

具体的には1913（大正２）年度・1923（大正12）年度・1928（昭和３）年度・1929（昭和４）年度・1931（昭和６）年度・1932（昭和７）年度の６年のデータが残されている。

旅館数は1913（大正２）年度（13軒）・1923（大正12）年度（15軒）・1928（昭和３）年度（17軒）・1929（昭和４）年度（17軒）・1931（昭和６）年度（19軒）・1932（昭和７）年度（20軒）を数え，大正期から昭和初期にかけて，徐々に増えている。ただし，統計上の数値であって，その他に旅館が存在したことは明らかである。内訳をみると，各年度共に，使用料徴収人員の多い宿屋氏名からリストアップされている。例えば，表２は1913（大正２）年度（13軒），表３は1932（昭和７）年度（20軒）となる。両者を比較すると，旅館数は13軒から20軒へ，確実に増加していることが分かる。使用料徴収人員は70,959人から60,7515人へ，伸び悩んでいるが，20軒の旅館で７万人前後の人員（入込）があったと推定出来よう。

7．鉄輪温泉の旅館名簿（1923年）

表４は「豊後温泉地旅館名簿」を整理したものである。1923（大正12）年６月の発行となる。鉄輪では15軒の旅館名と氏名を掲載し，旅館ごとに開業年が記載されている。参考になるが，恐らく，経営者が相続などで変わった際の届け出年月日と思われる。当然のことながら，明治・大正期の開業が多い。

8．最新別府温泉案内

『最新別府温泉案内』は1925（大正14）年の発行となる。本書では，鉄輪温泉として，「別

---

[6] 同資料のコピーは，河野忠之（温泉閣主人）所蔵。

表 2　鉄輪温泉における旅館の月別人員（1913年度）

宿屋氏名	屋号	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
安波利三郎	冨士屋本家	1,736	1,511	930	546	662	1,116	814	343	329	539	1,193	1,744	11,463
平川角太郎	辰巳屋	1,846	1,271	541	428	458	825	637	391	384	390	506	1,090	8,767
原キク	萬屋	1,367	1,418	818	884	813	665	638	253	242	343	541	730	8,712
安波利夫	冨士屋別荘	1,275	950	841	745	964	737	424	238	492	457	528	871	8,522
原蘇七	筑後屋	1,192	1,299	378	374	306	643	412	115	114	325	605	941	6,704
佐藤シヲリ	港屋	1,138	825	307	376	253	909	332	89	97	160	509	673	5,668
佐原亀太郎	中野屋	1,115	1,030	306	246	212	307	353	12	211	159	642	658	5,251
成瀬タツ	平野屋	1,107	1,086	211	155	164	643	285	60	84	230	444	666	5,135
加藤録三郎	常盤屋	543	566	314	297	500	431	473	196	172	240	372	465	4,569
河野リュウ	温泉閣	638	607	255	107	135	460	266	63	89	62	100	322	3,104
安波庄八	新屋	379	289	37		105	153	6	3	8	56	68	153	1,257
安波武平	上冨士屋	434	251	43	6	3	37	57	29	52	22	35	269	1,238
佐藤倉八	大平屋	119	42	22	21	38	27							269
13軒	合計	12,889	11,145	5,003	4,185	4,613	6,953	4,997	1,792	2,274	2,983	5,543	8,582	70,959

（注）1913（大正 2）年度鉄輪温泉使用料徴収人員各月宿屋別表により作成。

表 3　鉄輪温泉における旅館の月別人員（1932年度）

宿屋氏名	屋号	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
原キク	萬屋	678	653	382	334	432	371	358	305	423	648	524	1,018	6,126
安波利三郎	冨士屋本家	812	703	314	323	440	362	539	397	319	477	599	630	5,915
原蘇七	筑後屋	823	497	287	160	132	409	428	226	235	547	821	845	5,410
佐藤倉八	大平屋	940	532	470	382	345	422	462	145	205	456	416	567	5,342
安波利夫	冨士屋別荘	403	333	450	332	451	323	407	358	215	418	303	429	4,422
佐藤秀雄	港屋	656	451	250	105	242	167	155	91	171	540	730	845	4,403
安波牛太郎	御座	498	500	321	231	248	168	238	196	258	297	386	516	3,857
平川千博	辰巳屋	671	278	341	96	280	154	197	194	187	337	527	357	3,619
河野リュウ	温泉閣	433	293	140	87	194	390	229	46	67	169	561	583	3,192
加藤称司	常盤屋	357	105	379	187	332	218	317	148	99	229	284	306	2,961
佐原茂夫	中野屋	479	330	265	130	123	117	186	97	76	364	375	258	2,800
岡本米吉	朝日屋	262	164	66	130	215	127	187	124	43	209	442	430	2,399
原誠治	筑後屋新館	258	191	129	157	165	159	137	87	104	189	178	417	2,171
下田秋泉	平野屋	354	175	68	41	132	134	135	53	68	98	209	349	1,816
安波武平	上冨士屋	260	310	210	114	47	35	34	17	44	90	183	146	1,490
瀧澤シゲ	扇屋	244	91	12	104	163	111	171	101	57	134	130	137	1,455
嶋田マサ		82	107	88	90	121	131	61	63	29	80	77	96	1,025
小島マツヨ		208	59	77	61	110	174	68	6	15	96	66	77	1,017
安波庄八	新屋	131	93	81	21	7	32	51		15	65	180	91	767
山口篠一							40	115	29	29	28	121	166	528
20軒	合計	8,549	5,865	4,330	3,085	4,179	4,044	4,475	2,683	2,659	5,471	7,112	8,263	60,715

（注）1932（昭和 7）年度鉄輪温泉使用料徴収人員各月宿屋別表により作成。

表 4　鉄輪温泉の旅館名簿（1923年）

館名	氏名	開業年月日	西暦	電話
萬屋	原　キク	大正元年 9 月13日	1912	46
筑後屋	原　蘇七	明治34年 7 月11日	1901	47
本家冨士屋	安波利三郎	明治27年 4 月10日	1894	8
冨士屋別荘	安波利夫	明治34年 1 月21日	1901	2
大平屋	佐藤倉八	明治41年 5 月 4 日	1908	3
温泉山	河野リウ	明治43年 5 月16日	1910	14
泉屋	後藤太郎兵衛	大正11年 4 月 4 日	1922	55
上冨士屋	安波武平	明治39年10月12日	1906	22
常盤屋	加藤将司	大正 9 年 6 月 1 日	1920	30
港屋	佐藤シオリ	明治27年 4 月12日	1894	34
辰巳屋	平川信勝	明治20年10月 2 日	1887	9
中野屋	佐原亀太郎	明治20年10月 2 日	1887	25
新屋	安波庄八	明治20年10月 2 日	1887	7
平野屋	成瀬カヨ	大正 7 年12月11日	1918	27
菅原屋	菅又三郎	大正11年11月18日	1922	6

（注1）豊後温泉地旅館名簿（1923年6月）により作成。
（注2）別府宿屋組合事務所発行。

府の西北一里半。四境幽趣，旅館多く，商家櫛比し，温泉豊富にして戸数150，1ヶ年の浴客延人員10萬を算して居ります。往昔，此地は八街四面の一大地獄であったが，後宇多天皇，建治3年，一遍上人大藏経の1字1石を投じて，之を埋め，其上に温泉場を開いたと傅へられます。(以下，略)」と記載されている（一部現代文に変更)。ここでは，旅館・浴客の多さを伝えている。

著名旅館として次の屋号をあげている。具体的には16軒で，イロハ順では，泉屋・常盤屋・筑後屋・大平屋・温泉閣・上冨士屋・萬屋・辰巳屋・中野屋・冨士屋本家・冨士屋別荘・新屋・朝日屋・港屋・平野屋・菅原屋となる。

9．鉄輪温泉の旅館名簿（1937年）

表5は鉄輪温泉の旅館名簿（1937年）である。「別府市旅館一覧表」（別府旅館協会）の一部で，1937（昭和12）年，別府旅館協会の発行となる。表によれば22軒の旅館が記載されている。旅館ごとに室数・畳数が掲載され，室数では，萬屋29室・大平屋25室・冨士屋別館23室・港屋23室・常盤屋22室・朝日屋22室の6軒が20室を超えている。なお，8軒の旅館が100畳を超え，大型化している。

新しく開業した旅館は，現在のいでゆ坂・銀座通りなどに点在している。

表5　鉄輪温泉の旅館名簿(1937年)

館名	室数	畳数	畳/部屋	電話
大平屋	25	163	6.52	3
御座屋	15	83	5.53	45
冨士屋別館	23	145	6.30	2
新屋	12	72	6.00	7
冨士屋本館	19	115	6.05	8
上冨士屋	15	93	6.20	23
筑後屋本館	19	109	5.74	47
平野屋	10	70	7.00	27
港屋	23	132	5.74	34
温泉閣	7	41	5.86	14
辰巳屋	16	92	5.75	9
中野屋	9	49	5.44	25
泉屋	9	52	5.78	
万力屋	10	60	6.00	72
扇屋	10	51	5.10	41
筑後屋新館	19	100	5.26	58
常盤屋	22	147	6.68	30
萬屋	29	182	5.00	46
瓢箪館	10	50	5.67	29
鶴屋	9	51	5.67	
丸美屋	7	41	5.86	68
朝日屋	22	140	6.36	51
合計	340	2,038	5.99	

(注1)「別府市旅館一覧表」(1937年)により作成。
(注2)別府旅館協会の発行。
(注3)1部屋当たりの畳数は算出した。

10. 温泉大鑑

『温泉大鑑』は，1941（昭和16）年の発行で，全国の温泉地や温泉旅館のデータを満載しており，資料的な価値は大きい。表 6 は，同書によって，鉄輪温泉における旅館の室数と収容数など（1940年）を整理したものである。鉄輪の旅館数は27軒を数え，その立地は，蒸し湯から周辺部へ展開している。部屋数は全体で359室，1,077人収容に増大している。部屋数は萬屋の36軒を筆頭に，20室を超える旅館は 6 軒を数え，旅館規模の拡大がみられる。具体的には，大平屋25室・冨士屋23室・朝日屋23室・常盤屋20室・筑後屋本店20室である。

旅館ごとに温泉の湧出状況・泉温などが記載され，貴重な資料と言えよう。

11. まとめ

明治期以降に発行された各種資料をもとに，別府市鉄輪温泉を事例として，旅館業の成立を追究したが，その結果は，次のようにまとめることが出来よう。

(1) 鉄輪温泉の旅館業は，江戸後期には蒸し湯を中心として成立したものと言えよう。その後，

表 6　鉄輪温泉における旅館の室数と収容数（1940年）

施設名	室数	収容数	滞在料金賄式	1・2泊料金	娯楽施設	湯銭入湯税	湧出状況	泉温		電話番号鉄輪
								源泉	浴槽内	
常盤屋	20	65	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	A	60	48	30
筑後屋本店	20	63	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	A	60	48	47
筑後屋新館	18	47	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	A	60	48	5
御座屋	12	33	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	B	62	49	45
大平屋	25	81	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	A	62	49	3
扇屋	10	28	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	A	62	49	49
上冨士屋	13	38	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	A	60	48	23
萬屋	36	116	1.5-3.00	2.00-3.55	卓球	5	A	60	48	46
辰巳屋	13	34	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	A	60	48	9
冨士屋	23	67	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	A	60	48	2
冨士屋支店	10	30	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	A	60	48	8
港屋	17	56	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	A	60	48	34
白池	9	25	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	B	62	47	66
平野屋	10	36	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	B	62	47	27
瓢箪	9	23	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	B	62	47	29
備後屋	10	32	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	B	62	47	ナシ
温泉閣	7	23	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	B	62	47	14
瀧本屋	6	16	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	B	62	47	ナシ
大黒屋	3	8	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	B	58	44	ナシ
鶴屋	13	33	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	B	58	44	74
丸屋	5	14	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	B	58	44	ナシ
萬力屋	7	22	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	B	58	44	72
丸美屋	10	28	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	B	58	44	68
朝日屋	23	74	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	A	65	48	51
新屋	11	33	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	A	65	48	7
泉屋	8	24	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	A	62	45	ナシ
にしき屋	11	28	1.5-3.00	2.00-3.55	ナシ	5	A	62	45	ナシ
合計	359	1,077								

（注1）日本温泉協会（1941）『日本温泉大鑑』博文館，1,286頁，により作成。
（注2）1940（昭和15）年 4 月調査。
（注3）湧出状況　A：自然湧泉の引湯　B：掘削泉の引湯。

明治初期・昭和初期など，時代的な変化で，温泉集落が拡大することになった。

(2) 主な旅館業は，蒸し湯を取り囲むように成立しているが，有力旅館である萬屋と常盤屋は屋敷が広く，別府に至る街道（現在の湯けむり通り）沿いで，蒸し湯の入り口に位置している。

(3) 冨士屋の分家として，上冨士屋・新屋などが開業している。

(4) 旅館開業時の経営者の職業は明確ではないが，当時は全般的に農業と言えよう。その他では，資産家の冨士屋・庄屋の港屋・永福寺宿坊の温泉閣などがあげられよう。

(5) 老舗旅館や有力旅館のルーツは，鎌倉時代や16世紀にまでさかのぼると言われているが，その事実認定は今後の研究課題としたい。

(6) 屋号については，末尾に「屋」を用いるケースが多い。旅館という名称が正式に用いられた時期も明確ではない。今後の研究課題としたい。

参考文献

安藤平太郎（1902）『大分縣案内』，434，第9回西南区実業大会.
後藤武夫（1987）「別府市湯山の史蹟―湯の花採集場―」『別府史談』創刊号，49-51.
稗田武士（1925）『最新別府温泉案内』，122，大別府聯盟協会.
小堀貴亮，山村順次（2004）「別府市鉄輪温泉における湯治場の地域変容」『温泉地域研究』(2)，49-54.
永井蘇陽（1906）『鉄輪漫遊五人の奇遇』，159，永昌堂.
日本温泉協会（1941）『日本温泉大鑑』，1286，博文館.
大山琢央（2007）「近代における別府鉄輪温泉の諸相」『史学論叢（別府大学）』(37)，1-14.
浦達雄（2006）『別府温泉郷の観光地域形成に関する研究』，218，クリエイツ.
浦達雄，室岡祐司（2018）「別府市鉄輪温泉における長期滞在の実態」『温泉地域研究』(31)，49-56.
矢田保（1987）「局（つぼね）観音の由来について」『別府史談』創刊号，42-44.
山村順次（1981）「温泉観光都市・別府の地域変化」『千葉大学教育学部紀要』*30*，1部，129-155.
安波利一（1988）「安浪と安波」『別府史談』(2)，51-52.